様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　７ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１１６６

研究課題名（和文）排除される文化：ムスリム移民と嗜好品に関する人類学的研究

研究課題名（英文）Culture of Exclusion: An Anthropological Study of Muslim Immigrants and Shikohin

研究代表者
大坪　玲子（Reiko, Otsubo）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：２０５０９２８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アジア系移民（特にムスリム移民）とホスト社会の間の「文化」をめぐる問題を、嗜好品という切り口から捉え直すことを目的とした。具体的には、ヨーロッパ諸国と韓国においてイエメン系移民・難民への聴き取り調査を実施した、その結果、ムスリム移民は宗教に基づく排除だけでなく、「文化」に基づく排除にも晒されていること、またヨーロッパ諸国内と韓国で、排除のあり方とそれに対するイエメン系移民・難民の対応が異なることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
宗教に基づく排除として、イスラモフォビアの広がるヨーロッパでムスリム女性のヴェールが規制されていることは有名である。一方でムスリム移民の「文化」に基づく排除は等閑視されてきた。本研究ではイエメン系移民・難民に焦点を当て、故国では一般的な嗜好品が、移民先で違法薬物に認定されるなか、彼らがどのようにその状況に対応しているのかを探り、ヨーロッパ諸国でのある意味「寛容」な状況と、韓国における「非寛容」な状況を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study aims to examine cultural issues between Asian immigrants (particularly Muslim immigrants) and host societies through the lens of Shikohin, psychoactive substances. Specifically, interviews were conducted with Yemeni immigrants and refugees in European countries and South Korea. The research revealed that exclusion based on culture in addition to religion is prevalent among Muslim immigrants, and the methods of exclusion and responses from Yemeni immigrants and refugees differ between European countries and South Korea.

研究分野：文化人類学

キーワード：嗜好品　移民　イエメン　カート　難民　内戦　ムスリム　排除

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は博士論文およびそれを大幅に書き直した単著において、イエメンにおける嗜好品カートの生産・流通・消費を明らかし、イスラームや、イエメン社会の特徴といわれる部族や、売り手と買い手の信頼関係といった既存の人間関係は単なる選択肢の 1 つであることから、イエメン社会の特徴を「ゆるやかな関係」と呼んだ。その後移民社会における嗜好品の役割について解明するためエチオピアのイエメン系移民に聴き取り調査を行った。エチオピアにおいてもカートは嗜好品であるが、①カートはイエメン系移民コミュニティを維持する機能を果たしていないこと、②消費方法はイエメン式ではなくエチオピア式であること、③カートよりも飲み物の方にイエメン社会の影響を残していることが明らかになった。移民と嗜好品の関係を検討するために、カートが違法薬物に認定されている国で調査を行う必要を感じた。というのも嗜好品は政治的な判断でいつでも違法薬物になるからである。

２．研究の目的

本研究の目的は、アジア系移民（特に中東からのムスリム移民）とホスト社会の間の「文化」をめぐる問題を、嗜好品という切り口から捉え直すことにある。政治的経済的に善悪の判断がされないはずの「文化」が、移民のもたらしたものというレッテルが貼られると、政治的な判断が加えられるからである。文化による移民排除の事例としての嗜好品は、宗教による排除としてのヨーロッパにおけるムスリム女性のヴェールと同様に政治性を帯びている。

文化による移民排除の事例として、近年ヨーロッパで問題になっているのがカートである。カートは長い間主に東アフリカ諸国とイエメンで消費されていたが、1990 年代にソマリア内戦の激化とともにソマリア系移民が大量に欧米諸国に流入し、彼らを追うようにカートも欧米諸国に広がった。カートは怪しげな移民の持ち込む怪しげな風習という前提で調査され、移民の抱える社会問題（ホスト社会に溶け込まない、スラム街を形成する、離婚率の上昇、低い就学率、高い失業率等）の原因とみなされた。この結果ヨーロッパ各国ではカートの薬物認定が進んだが、移民のホスト社会への統合は進まず、社会問題は解決していない。カートが移民によってもたらされた「悪」というレッテルを貼った研究ゆえの結果である。

ヴェールのように宗教を想起させるアイテムと異なり、嗜好品は非宗教的なアイテムであるが、その捉えられ方が移民とホスト社会によって異なるため、文化摩擦を引き起こす。しかもカートが違法薬物に認定されたことによって、新たに起こるであろう社会問題、例えばカートの流通や消費によって維持されてきたコミュニティへの影響や、他の嗜好品への依存の解明は進んでいなかった。従来のムスリム移民研究は、宗教による排除が研究対象となってきたが、本研究は文化による排除が移民社会に何をもたらしたのかという点を明らかにした。

３．研究の方法

カートが違法薬物に認定された状況で、イエメン系移民がカートや他の嗜好品を消費するのか、あるいはしないのか、消費するのなら誰とどのように消費するのか、しないのであればその代替品や活動を聴き取り調査を通じて明らかにした。

当初はヨーロッパ諸国とアラブ首長国連邦（UAE）での調査を計画していたが、新型コロナウィルスの影響により UAE での調査が困難になり、調査可能な国として韓国に変更した。ヨーロッパ諸国の調査も 2018 年にイギリス、オランダ、2019 年にドイツで行ったが、フランスでの調査は新型コロナウィルスの影響で断念した。

４．研究成果

（１）ヨーロッパ諸国におけるイエメン人とカート

本研究で注目するカートはイエメンや東アフリカ諸国では嗜好品として扱われるが、ヨーロッパでは違法薬物認定が進んでいる。ドイツは 1998 年、イギリスは 2012 年、オランダは 2014 年にカートを違法薬物に認定した。イギリスとオランダは比較的薬物に寛容であるが、イギリスのヒースロー空港やオランダのスキポール空港がカートの「ハブ空港」つまり両空港まで合法的

に空輸されてきたカートが、その後欧米諸国に密輸されてしまうことが、違法薬物認定の理由である。

イギリス、オランダ、ドイツの３ヶ国の共通点として、いずれの国においてもカートは密輸されていた。カートの違法薬物認定は、薬理学的な理由よりもむしろ政治的は判断に基づくことは、ヨーロッパ諸国に住むイエメン人も理解しており、カートに対する後ろめたさは感じられなかった。

イギリス、オランダでは違法薬物に認定される前は毎日新鮮なカートを購入し消費することが可能であり、調査当時でも週に１度、乾燥カートが購入できた。３ヶ国ともにソマリア系の商人に携帯電話で連絡をすれば、乾燥カートや、時には新鮮なカートを購入可能であった。カートを消費するのに大人数が集まるというわけではなく、家族や友人と消費する程度である。密輸されているのはエチオピア産やケニア産で、イエメン産はほとんどない。これは違法薬物認定以前と同じである。

カートの違法薬物認定前後の 3 ヶ国の状況を以下に述べる。イギリスのロンドンでは違法薬物認定以前、毎日新鮮なカートが店舗で販売されていた。ムスリムの結婚式でイエメン人がカートを噛みながら出席することもあった。認定以降は週に１度乾燥カートが手に入る程度であり、それを自宅で噛むのが通例となった。

オランダのＢ市では、認定以前はアパートの一室のようなカートを噛む場所（マフラシュ）があり、そこにソマリア系、エチオピア系、イエメン系、スーダン系、オランダ人等が集まり、カートを噛みながら、共通語であるオランダ語で会話をし、時にテレビでサッカー中継を見てすごしていた。マフラシュではなく個人の家で友人とカートを楽しむ者もいた。マフラシュは市内に数ヶ所あった。マフラシュに集まるのは男性だけで、女性はカートを噛む人数が少なく、家で噛んだ。違法薬物認定以降、マフラシュは閉鎖され、代わりになる集会は開かれていない。スポーツのようなカート以外の楽しみを見つけたり、密輸カートを自宅で噛んだりしているのが趨勢である。オランダのＣ市では違法薬物認定以前、市内に住むイエメン人が土曜日に SNS で連絡をとって集まり、一緒にすごしていた。カートを噛む者もいれば、噛まない者もいた。認定以後もこの集まりは続いている。その理由として少人数であること、SNS で連絡をとる一種の世話人がいることが大きい。

ただしヨーロッパ諸国に住むイエメン人が、みなカートを切望しているということではない。イギリス、オランダは違法薬物認定以降、カートが高騰し、しかも新鮮なカートが入手しにくくなった。乾燥カートは新鮮なカートに比べて味が落ちると言われている。カートに限らずヨーロッパでは生活費自体がイエメンよりもかかる。このような理由が挙げられるが、何よりイエメンとヨーロッパでは生活のリズムが異なり、イエメンのように毎日午後数時間かけてカートを噛むことはヨーロッパでは不可能である。平日は仕事に忙しく、週末は家族とすごす時間になるからである。子どもは平日は現地校、週末にコーラン学校に通う等、子どもの送迎にも時間がかかる。若い世代はイエメンでカートを噛まずにヨーロッパ諸国に来ているので、特にカートを熱望しないという、世代間の差も見られた。

カートの代替となる嗜好品としてアルコール飲料が考えらえるが、3 ヶ国に住むイエメン人の間ではそれほど普及しているようではない。個人的にアルコール飲料を消費するにしても、イエメン人の間で大っぴらに公言することはないようである。

以上の調査成果についてポーランドで開催された IUAES（the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences） Commission on the Middle East において“Changing Meanings of Qat Consumption inside and outside Yemen”と題した口頭発表を行ったほか、論文は『嗜好品文化研究』に「嗜好品から薬物へ：イギリス・オランダのイエメン人とカート」(2020 年)、および「カートを噛みながら：人類学とインタビューと嗜好品」(2021 年）を発表した。

（２）韓国におけるイエメン人とカート

内戦の続く故国から国外へ逃れるイエメン人のうち、500 人以上がマレーシア経由で韓国の済州島に辿りついた。難民申請の結果、彼らのうち数名が難民に認定され、それ以外のほとんどが人道的滞留許可という身分を得た。認定難民の保障された生活に比べ、人道的滞留許可の場合、自ら稼ぐことが要求される。韓国語も苦手なイエメン人は、韓国人が嫌がる工場や建築現場等、韓国社会の最底辺で働く外国人労働者として生活している。

ヨーロッパに住むイエメン系移民同様に、韓国においても彼らはカートを熱望していない。またヨーロッパ以上にカートについて語ることができない。ヨーロッパと同様に韓国においてもカートは違法薬物であるが、韓国では彼らは「難民」であり、常に差別の対象であることも関係している。カートの代替品（煎茶を噛む）を見つけた者もいるが、代替品にはカートのような結衆の効果はない。またカートを噛む習慣を身につける前に、イエメンを出た若者も少なくない。韓国の週末は日曜日であり、モスクでムスリムと交流するというわけでなく、スマートフォンでイエメンに住む家族と話したり、動画を視聴したりしてすごす。その意味でスマートフォンが彼らの新たな嗜好品とも言える。韓国においてもアルコール飲料は合法とはいえ、カートの代替に

なっていない。ほとんどのイエメン人はアルコール飲料をたとえ個人的に嗜むとしてもほとんど公言しない。カートがコミュニティ形成や維持に使われるわけではなく、彼らが韓国社会からカートとともに排除されるからと言って、アイデンティティ維持のためのアイテムや機会を模索しているわけでもない。韓国に住むイエメン人同士で住居や職場が近いというわけではなく、むしろ韓国各地に散らばっている。SNS で容易にグループを作り、情報交換ができるとはいえ、移民や難民に想定されがちな強固な共同体は、調査の限り見えなかった。

以上の成果は 2023 年 2 月に開催された韓国・朝鮮文化研究会第 83 回研究例会において「韓国で働くイエメン人」、5 月に開催された日本中東学会第 39 回年次大会において「韓国で働くイエメン人は難民」、9 月にトルコで開催された IUAES, Commission on Anthropology of the Middle East において“Working Refugees: Yemenis in South Korea”(2023 年)、10 月に香港で開催された East Asian Anthropological Association Annual Meeting において“Humanitarian Exploitation: Yemenis in South Korea”(2023 年)とそれぞれ題して報告した。論文は電子ジャーナル *Arabian Humanities* に寄稿し、2024 年度中に公開予定である。

（３）ヨーロッパ諸国と韓国の比較

ヨーロッパでの調査対象は、主にイエメン内戦以前にヨーロッパに移住したイエメン系移民である。彼らはヨーロッパ社会で「見えない」存在である。移民としての歴史は浅くないが、絶対数が少ないためイエメン人がヨーロッパの移民問題で注目されることはない。ヨーロッパにおいてカートと関連付けられるのは、ソマリア系移民である。難民問題として名前が挙がるのはシリア難民であり、彼らはイエメン人より少し早い時期から、イエメン人よりも大量にヨーロッパ諸国に向かった。

一方韓国で調査対象としたイエメン人は「難民」であり、彼らが韓国に来たことで難民問題やイスラモフォビアが韓国国内で議論された。彼ら自身がカート事件を起こし、彼ら自身がカートと関連付けられる。見た目も韓国人と異なる。韓国においてイエメン人は「見える」存在である。そのため韓国に住むイエメン人の方が露骨に差別されている。イエメン人として、ムスリムとして、「難民」としてカートとともに韓国社会から排除される一方で、安価な外国人労働者として、韓国社会から必要とされている矛盾が明らかになった。

イエメン人がカートとともに排除される現状を国立民族学博物館主催のシンポジウム The 1st International Symposium of the Indian Ocean World Studies において“From the Edge of the Indian Ocean: Qat as a Symbol of Inclusion and Exclusion”として発表し（2023 年)、2024 年度中に論文が公開予定である。

（４）嗜好品の検討

嗜好品はドイツ語の Genussmittel を訳したものである。中国語や韓国語にはあるが、日本語から翻訳されたものだと考えられる。アルコール飲料、カフェイン飲料、タバコは世界中で消費されているが、しかしそれを一括りにする嗜好品という表現は英語やフランス語をはじめとする言語にはない。そのため嗜好品研究は国際的な比較研究になり得ていない。日本では嗜好品の学際的な研究がこれまで続けられてきたが、嗜好品の消費が注目される一方で、嗜好品が本来的に備えている国家権力との関係、つまり一種の奢侈品である嗜好品が課税や規制の対象となってきたことは等閑に付されてきた。

以上については大坪と谷が共編者となった論集『嗜好品から見える社会』（春風社、2022 年）の序論で論じた。同書は国立民族学博物館現代中東地域研究拠点との共催で企画したシンポジウム「境界を楽しむ：中東・イスラーム世界の嗜好品」の成果でもある。同シンポジウムはコロナ禍の影響でオンライン開催となったが、そのため広く社会に研究成果を還元できる機会となった。

論文は *Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient* において“Popular Culture or Drug: Controversial Qat in Yemen”および『アラビア半島の歴史・文化・社会』において“Fluid Merchants and Consumers: Qat and Yemeni People”と題して刊行された。また小田淳一氏との共同研究「カート・オントロジー構築の試み」は、日本人工知能学会 2020 年度研究会優秀賞に選ばれた。

国際的な学会への参加は、2018 年にスペインで開催された WOCMES((World Congress on Middle Eastern Studies)において“Flirtatious Merchants in Yemeni Qat Markets”、および 2023 年モロッコで開催された The International Workshop: The Taste of Knowledge において“Chewing Qat with Adnan”とそれぞれ題して、イエメンにおけるカートの社会的な役割を確認した。後者は論文集としてオランダの Brill 社から刊行される予定である。

新型コロナウィルスの蔓延を受けて研究が一時期中断し、その後も当初の計画通りの調査と

はならなかった。韓国での調査は当初の計画にはなかったが、難民と嗜好品の関係を考察するうえで有意義な調査が実施できた。ヨーロッパ諸国での調査のインフォーマントは内戦による難民ではなかったため、ヨーロッパ諸国に向かったイエメン人難民が、どのように排除されるのかは今後の課題としたい。
イエメンにおけるカート研究では、人々を結びつける「結衆」の効果が注目された。カートはエチオピアのディレ・ダワや、オランダのC市のように、民族や国籍を超えて人々を結びつける力を持つ。しかし一方で移民コミュニティを維持するような力を発揮しないことが、ヨーロッパ諸国と韓国の調査で明らかになった。SNS では繋がっていても、それは「想像の共同体」にすぎない。ヨーロッパ諸国や韓国でも見られる「ゆるやかな関係」は今後も検討していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 大坪玲子	４．巻 180
２．論文標題 嗜好品研究からみえるもの	５．発行年 2022年
３．雑誌名 季刊民族学	６．最初と最後の頁 3-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大坪玲子	４．巻 6
２．論文標題 団欒と社交のある暮らし：イエメン・サナアの事例から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 イスラーム・ジェンダー・スタディーズ6 うつりゆく家族	６．最初と最後の頁 40-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大坪玲子	４．巻 6
２．論文標題 カートを噛みながら：人類学とインタビューと嗜好品	５．発行年 2022年
３．雑誌名 嗜好品文化研究	６．最初と最後の頁 137-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大坪玲子	４．巻 180
２．論文標題 嗜好品研究からみえるもの 特集嗜好品：つくる・映える・やみつきになる	５．発行年 2022年
３．雑誌名 季刊民族学	６．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大坪玲子　小田淳一	4．巻 —
2．論文標題 カート・オントロジー構築の試み	5．発行年 2021年
3．雑誌名 人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料集SIG-LSE-C101	6．最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 大坪玲子	4．巻 5
2．論文標題 嗜好品からドラッグへ：イギリス・オランダのイエメン人とカート	5．発行年 2020年
3．雑誌名 嗜好品文化研究	6．最初と最後の頁 84-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 大坪玲子	4．巻 5
2．論文標題 嗜好品からドラッグへ：イギリス・オランダのイエメン人とカート	5．発行年 2020年
3．雑誌名 嗜好品文化研究	6．最初と最後の頁 84-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 大坪玲子	4．巻 4
2．論文標題 嗜好品文化研究の最前線	5．発行年 2019年
3．雑誌名 嗜好品文化研究	6．最初と最後の頁 139-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

〔学会発表〕　計19件（うち招待講演　4件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 大坪玲子
2．発表標題 Humanitarian Exploitation: Yemenis in South Korea
3．学会等名 East Asian Anthropological Association Annual Meeting（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 大坪玲子
2．発表標題 Working Refugees: Yemenis in South Korea
3．学会等名 IUAES, Commission on Anthropology of the Middle East（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 大坪玲子
2．発表標題 Chewing Qat with Adnan
3．学会等名 The International Workshop: The Taste of Knowledge（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 大坪玲子
2．発表標題 韓国で働くイエメン難民
3．学会等名 日本中東学会第39回年次大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 Humanitarian Exploitation: Yemenis in South Korea
３．学会等名 East Asian Anthropological Association Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 Working Refugees: Yemenis in South Korea
３．学会等名 IUAES, Commission on Anthropology of the Middle East（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 Chewing Qat with Adnan
３．学会等名 The International Workshop: The Taste of Knowledge（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 韓国で働くイエメン難民
３．学会等名 日本中東学会第39回年次大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 韓国で働くイエメン人
３．学会等名 韓国・朝鮮文化研究会 第83回研究例会
４．発表年 2023年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 From the Edge of the Indian Ocean: Qat as a Symbol of Inclusion and Exclusion
３．学会等名 The 1st International Symposium of the Indian Ocean World Studies（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 第17回Book Launch 『嗜好品から見える社会』
３．学会等名 立命館大学中東・イスラーム研究センター
４．発表年 2022年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 合評会『嗜好品から見える社会』
３．学会等名 現代文化人類学会第3回定例研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大坪玲子　小田淳一
２．発表標題 カート・オントロジー構築の試み
３．学会等名 第65回ことば工学研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 品質か信頼か：イエメンのカート商人の選択
３．学会等名 シンポジウム 境界を楽しむ： 中東・イスラーム世界の嗜好品（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 イエメン人とカート：カートがあってもなくても
３．学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 嗜好品から見る社会 ：パン・マサラ、シーシャ、リッブ、カートの事例から
３．学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 嗜好品から考えるイエメン社会
３．学会等名 東京大学中東地域研究センター2019年度公開セミナー「アラビア半島の歴史・文化・社会」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 Changing Meanings of Qat Consumption inside and outside Yemen
３．学会等名 IUAES Commission on the Middle East（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大坪玲子
２．発表標題 Flirtatious Merchants in Yemeni Qat Markets
３．学会等名 WOCMES((World Congress on Middle Eastern Studies)（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

１．著者名 大坪玲子　谷憲一（編著者）	４．発行年 2022年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 424
３．書名 嗜好品から見える社会	

1．著者名 Casajus, Dominique, Nishio, Tetsuo, Pouillon, Francois, Tsuyoshi, Saito, eds, Reiko Otsubo, et.al.	4．発行年 2021年
2．出版社 National Museum of Ethnology	5．総ページ数 203
3．書名 Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient	

1．著者名 近藤洋平(編)、Reiko OTSUBO他	4．発行年 2021年
2．出版社 東京大学中東地域研究センタースルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座	5．総ページ数 259
3．書名 アラビア半島の歴史・文化・社会	

1．著者名 服部美奈,、小林寧子、大坪玲子他	4．発行年 2020年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 261
3．書名 イスラーム・ジェンダー・スタディーズ3 教育とエンパワーメント	

1．著者名 鈴木董、近藤二郎、赤堀雅幸、大坪玲子他	4．発行年 2020年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 826
3．書名 中東・オリエント文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関